

# はなせ診療所そよ風だより No 12

2011年5月 内科 吉澤泰介  
漢方よもやま話あれこれ

●かつてない高齢化社会の到来となって。

75才以上の高齢者が、向こう20年間にかけ1100万人から2200万人と増え、年間の死者も急増、特に、1965年頃は、死亡者のうち3分の2が、75歳未満のいわば若い方の死でしたが、それが今では3分の1になり、20年後にはさらに4分の1までに減るだろうと言われています。その一方で、今の死亡者の多くは、男性85歳、女性90歳で、要するに、多くの方が今や天寿を全うし、しかもその大部分は、病気や老衰を経て、病院で亡くなっています。(以上日本医事新報、辻哲夫氏の文章を引用、一部改編。)

今の病院は、治療の終了した高齢者の行き先が、なかなか見つからないことに一番頭を悩ませています。これは、国が、膨れ上がった医療費をなんとか減らすために、入院期間を短くしないと病院の収入が減るようなシステムを導入したからです。しかし国の言う医療費が膨れあがっているという見解は一方的で、先進国の中で一番少ない医療費と、医療者数で、世界一の医療の質(世界一、二の寿命)を誇っています。これは裏を返せば、今まで、医療者の長時間労働をいとわない、日本人の従来からの特性である献身的努力でなんとか凌いできたからです。

また、国は、病院以外の、住みなれた家や地域で亡くなる様に、在宅医療を推進する政策を、数年前に出しましたが、結局このままでは、帰るところがない医療難民が出るということで、医療現場からの猛反対にあい、最近その案も先送りとなりました。

町では、孤独死が問題となって久しいですが、その一方で、昔と違い老人のライフスタイルが変わり、都会では、ある程度元気なら医療とライフラインの整った施設で、家族に迷惑かけないで、ひとりで暮らしたいという高齢者は、増えている気もします。

当地では、すでに今もそのきざしが見えてきていますが、この数年以内に、診療所まで、車で送り迎えしなければ来れない高齢者は、確実にふえてくると思われます。その意味で医療と介護がセットになった当介護施設【花友はなせ】の存在は、全国でも珍しいらしく、手前味噌ですが、地域の方にとって心強い存在になっているのではと思います。

当地の10年20年後の、未来図が描ければ一番よいのですが……。なかなかままならず、今日に至ってるようです。いままで真剣になっても深刻にならず、なんとか苦境を凌いで来てるようです。結局その逆境をはねかえす、打たれ強ささえあれば、これからもたぶん苦境にたっても、なんとか凌いでいけるのではと思います。

● 今月の漢方。少し時期を過ぎましたが、連翹(レンギョウ)。黄色い花を2~3月頃つけ、夏によく熟した果実を採り蒸気を通し天日で乾燥させます。皮膚炎には、腫れものの炎症を治し中耳炎などにもよく効きます。私はまた、けいがい連翹湯という漢方をよく使います。アトピー、喘息などに効きます。

● はなせ診療所のホームページを作りました。ヤフー検索で、社会福祉法人市原寮→(右下の)はなせ診療所で開いて下さい。患者さんに頼まれ、【花背峠天国への道】という歌を作りました。